

『緬甸館来文』に見られる ビルマ文字表記漢語について

更 科 慎 一

1. はじめに

1. 1. 『華夷訳語』とその『緬甸館訳語』

本稿において取り上げる『緬甸館訳語』は、いわゆる乙種本華夷訳語の一種を成すビルマ語と漢語の対訳教科書である。『華夷訳語』は一般に甲乙丙丁の四種に分類され、ビルマ語のものは乙種と丁種に見られる。

乙種本は他の語種のものと同様、「雑字」と呼ばれる対訳語彙集と「来文」と呼ばれる対訳文例集を含み、両者は別冊となっている。雑字と来文のいずれにも塞外文字が含まれているほか、雑字の各項には更に漢字音訳による発音表記が附せられている。諸本を有し世界各地の機関に所蔵されているが、そのうちの復旦大学所蔵本（上海古籍出版社（1995-2003）『続修四庫全書』第230冊及び愛如生電子版『四庫存目書』に、影印がある）には『緬甸館訳書校異』がある。ビルマ文字の音節綴りに対応する音訳漢字や、ビルマ語の同綴異義語などに関する一覧表で、緬甸館での教学の一端が窺える。この『校異』に類するものは、復旦本『緬甸館訳語』の他、次章に述べる内藤本の『西番館訳語』にも見られるが、他の乙種本には、管見の限り、見出されない。

丁種本は清代乾隆年間に編纂された華夷訳語で、故宮に所蔵されている。2018年に全部の影印本（張榮、春花編『故宮博物院蔵乾隆年編華夷訳語』18冊、故宮出版社）が出た。その第12冊に『緬甸番書』三巻があり、雑字のみであるが、音訳漢字に小字が使われるなど乙種本には見られない特徴があるほか、収録された語彙も大幅に改定されている。使用された文字は現在のビルマ文字と同じく円形であり、乙種本の単なる踏襲ではない。ビルマ文字の字母表があるが、これも乙種本には見られない内容である。

1. 2. 『緬甸館来文』

乙種本の「来文」は文章のテキストであり、漢文と民族語の対訳の形式をとる。内容は主として諸民族から明朝廷に上奏された表文や、逆に朝廷から諸民族に伝達された「勅書」及び「誥文」である。緬甸館訳語では、その他、一般書の一部がテキストとなっているものが数篇あり、乙種本全体の中で特異である。

『緬甸館訳語』の来文（以下、『緬甸館来文』と表記する）は、通常の意味での対訳（語

彙的・文法的・文脈的意味の翻訳関係)にはなっておらず、全て漢文を単にビルマ文字によって音訳して作ったものである。荻原(1965)は、このようなテキストが作成された目的について、「訳字官に、ビルマ語の発音とビルマ文字に習熟させるためのテキストではなかったろうか」と推測している。「漢文の音訳」を含む来文には他にも百夷館、八百館があり、そこでは意識と音訳を交錯させた形式が用いられているが、『西域同文表』本の百夷館来文は、意識部分を欠き、緬甸館来文と同様に、百夷語側が漢文の音訳のみとなっている。本稿筆者はこれまで、百夷館、八百館、西番館の来文を取り上げ、そこに見られる塞外文字表記漢語の音韻を分析した(更科(2022a, 2022b, 2023))が、本稿では、乙種本来文の中で最もまとまった量の塞外文字表記漢語を有する『緬甸館来文』を資料として、明代官話音研究の見地から分析を加えてみたい。

1. 3. 西田龍雄(1972)『緬甸館訳語の研究』と本研究との関係について

乙種本『緬甸館来文』に対する最も重要な先行研究は西田(1972)である。西田(1972)は、乙種本の来文にとどまらない、乙種・丁種『緬甸館訳語』に対する全面的研究であり、「ビルマ言語学序説」なる副題がつけられていることが示すように、その主目的は『緬甸館訳語』をビルマ語史の資料として位置づけ、その音韻・語彙・文法を記述し蔵緬語比較研究に役立てることにあつた。本稿は、ミヤゼディー碑文や、西夏語をはじめとする非常に多種の蔵緬語に対する研究業績もある西田氏の、途轍もなく広い視野を持った研究に何物を付け加えるものでもなく、ただ来文に現れる730個あまりの漢字に対するビルマ文字表記を、中国語音韻史の立場から論じるものである。

西田(1972)は、その第四章において、東洋文庫本『緬甸館来文』全30通の漢文面を示し、それに対応するビルマ文字表記をローマナイズし、日本語訳を加えるとともに、来文の成立年代や明代の緬中関係についても考察を加えているが、本稿にとりわけ重要なのは、「漢語の緬甸字転写」の部分である。西田氏は、『緬甸館訳語』及び他の明代の華夷訳語に基づいている漢語音系を、明の徐孝の作った韻図『重訂司馬温公等韻図経』の記述する音系によって理解するのが最も適切であるとし、具体的作業においては、陸志章の再構音価に従っている¹。この考え方に基づいて、西田氏は、来文に見える漢字音のビルマ文字表記が示す音形式を、『等韻図経』の音韻体系と一つ一つ照らし合わせて、両者の対応関係を考察した。特に韻母については、完全に『等韻図経』の韻撰の枠組みを利用して漢語音表記を整理している。これに対し本

¹ 西田(1972: 6) 参照。

稿では、華夷訳語が基づいている漢語音そのものが探究の対象であるから、『等韻図経』などの他の漢語音韻資料の音韻体系をビルマ文字表記に当てはめる手法は当然取れない。ビルマ文字に即してその表記様相を整理し、ビルマ文字表記と中古音の韻撰との対応関係を確認した上で、西田（1972）の研究が示しているビルマ語の音韻体系を参照しながら、ビルマ文字表記が漢語のいかなる音声を表現していると言えるかを示したい。実際にはいろいろな問題があり、この資料から漢語音声の詳細に対する情報を引き出すのはなかなかやっかいなのであるが、この資料の限界を示すことにも、一定の意味はあると信じる。

西田（1972）では、来文のテキストとして、基本的に、東洋文庫本のみを使用しているが、本稿では、次章に述べるように、三種のテキストを参照し、来文の通数も東洋文庫本所収の30通より多い70通を参照することができた。この点も、本稿と西田（1972）との違いであると言える。

2. 本稿の資料

本稿では、『緬甸館来文』のテキストとして、主に以下の三種を利用した。

1) 内藤本。現在公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋に所蔵されている「華夷訳語不分卷十冊」（恭96）である。杏雨書屋（1985）所載の山鹿誠之助氏による解説によれば、この書は内藤湖南博士が大正六年（1917）に上海の書肆楽善堂から購入したものである。杏雨書屋（1985）序（羽田明氏による）によると、この『華夷訳語』は昭和13年（1938）に内藤家から武田家にゆずられ、昭和52年（1977）6月に武田科学振興財団に寄贈された。かくして現在は、「説文解字木部残卷」をはじめとする国宝や重要文化財を収蔵することで名高い「恭仁山莊善本」文庫の一部となっている²。

内藤本を構成する十冊の内容の詳細は紙幅の都合で省略するが、この本は、版式の特徴、共に「古香楼」「休寧性李青家藏書籍」「擒藻堂」の印記を有すること、共に「校異」を含む点、及び下表に示す如く内容上の重複が一切ない点から見て、もとは復旦大学蔵本と同一のテキストだったものが、内藤氏の手へ渡るまでの間に、何らかの原因で分割されたものであると見られる。そして、表1から見て、両本に欠けた内容がなお存していることが明らかである。残缺部分のテキストが今後発見されることが期待される。

² 2023年10月28日から12月1日まで、杏雨書屋において第77回特別展示会が開かれ、『華夷訳語』も展示に供された由である。その「図録」（杏雨書屋（2023: 25））に、色刷りの書影（暹羅館来文及び西番館訳書考異）が載せられている。図録をわざわざ送付いただいた杏雨書屋の御厚意に感謝申し上げたい。

表1 内藤本と復旦大学本の『華夷訳語』の内容（復=復旦本にあり、内=内藤本にあり）

	回回	高昌	女真	西番	緬甸	百夷	八百	暹羅
雑字正編	復				内	復	復	
雑字続編	復				復	復	内	
来文	内	復	内	復	内			内
『校異』				内	復			

内藤本の『緬甸館来文』は上下巻併せて70通がある。杏雨書屋閲覧室にて上下巻の複製本（カラー写真）を閲覧したほか、「上巻」35通のデジタル白黒写真を取得した。

2）東洋文庫本。明抄本。西田龍雄（1972）が用いたテキスト。30通がある。同文庫閲覧室にて原本（貴 XI-5-2）及び写真帖（貴 XI-5-3）を閲覧した。以下、東洋本と略称することがある。

3）『西域同文表』本。清抄本。20通がある。現在国立公文書館（もと内閣文庫）所蔵。国立公文書館 website より閲覧した。以下、西域本と略称することがある。

『西域同文表』本に収録された来文は全て東洋文庫本に含まれ、また東洋文庫本に収録された来文は全て内藤本に含まれているため、内藤本に収録された70通が、本稿において我々の用いることのできる全ての資料であることになる。

以下に、三本のうち内藤本のみに含まれている「上巻」35通の冒頭部分を記す。冒頭部分は、大部分を占める奏上文の場合は奏上者であり、詔勅の場合（「勅」の字で始まる）はその宛先である。例外として、次の四点が指摘できる。

- ・第十四通は地方の行政官と見られる人物から「雲南鎮守大人」への通信文で、差出人がない。
- ・第十五通は「孟養思六告」で始まり、動詞に“奏”ではなく“告”が使われている。
- ・第十六通は礼部による「申扱」。
- ・第31、32通は上奏文でも詔勅でもない文章である。

1. 緬甸土官宣慰ト刺浪
2. 緬甸軍民宣慰使司差来頭目思完広刺等
3. 緬甸宣慰使司宣慰使ト刺浪
4. 木邦孟密宝井地方陶孟掃硬罕送法
5. 雲南緬甸軍民宣慰使司
6. 緬甸宣慰使司ト推恩
7. 雲南緬甸軍民宣慰使司
8. 緬甸宣慰使司ト刺浪
9. 木邦宝井隴扛地方曩罕弄思柄法母子二人

10. 孟養金沙江奴婢思落法
11. 雲南車里軍民宣慰使司
12. 勅諭雲南緬甸軍民宣慰使司宣慰使卜刺浪
13. 雲南緬甸宣慰使司莽己推差陶孟人等
14. 老撾人沒緣故領人馬來…
15. 孟養思六告 天皇帝…
16. 礼部為夷情事拋会同館…
17. 緬甸宣慰使司卜刺浪
18. 雲南緬甸軍民宣慰使司卜刺浪差頭目打戛速等
19. 雲南八百大甸軍民宣慰使司
20. 緬甸宣慰使司
21. 雲南木邦軍民宣慰使司罕門法
22. 雲南緬甸宣慰使司卜刺浪
23. 雲南緬甸軍民宣慰使司卜刺浪
24. 木邦孟密宝井孟木隴扛囊罕弄思柄法
25. 緬甸宣慰使司卜刺浪
26. 木邦宝井孟密隴扛陶孟掃硬罕送
27. 緬甸軍民宣慰使司卜刺浪差來頭目打戛速等
28. 緬甸宣慰使司卜刺浪招賀罕
29. 雲南緬甸宣慰使卜刺浪
30. 緬甸宣慰使司卜刺浪招賀罕
31. 【文章】北方属陰地方多寒…
32. 【文章】天下郡只要太平若太平了人民箇箇快活…
33. 雲南緬甸宣慰使司宣慰卜刺浪
34. 緬甸宣慰使司
35. 雲南緬甸軍民宣慰使司

また、内藤本「来文」下巻35通については、第31-35通を除き、東洋文庫本に見え、その順序も同じである。西域同文表本の20通との対応関係も含め、下巻各文書の冒頭部分を次に記す。

表2 内藤本『緬甸館来文』下巻の内容、及び東洋文庫本、西域同文表本との対応

内藤本	東洋本	西域本
1. 勅諭雲南緬甸軍民宣慰使司宣慰使卜刺浪	1	1
2.【文章】緬甸地方東至木邦宣慰使司界…	2	2
3.【文章】老撾自古不通中国…	3	3
4.【文章】緬甸古西南夷其地旧有…	4	4
5.【文章】緬甸地勢広衍人有城廓…	5	5
6.【文章】八百大甸軍民宣慰使司東至老撾宣慰使司界…	6	6
7.【文章】八百宣慰使司世伝其土酋…	7	7
8.【文章】孟養宣慰使司地名香栢城元時至元二十六年…	8	8
9. 雲南隴川宣撫司	9	—
10. 緬甸宣慰使司卜刺浪	10	10
11. 皇帝勅諭雲南緬甸軍民宣慰使司宣慰使卜刺浪	11	11
12. 勅諭雲南平緬軍民宣慰使思任法	12	12
13. 緬甸宣慰使司卜刺浪	13	13
14. 勅諭雲南威遠州知州刀盖罕	14	14
15. 緬甸宣慰使司卜刺浪	15	15
16. 緬甸宣慰使司	16	16
17. 緬甸宣慰使司招賀罕宣慰卜刺浪差来陶孟打憂速等奴婢兩箇	17	17
18. 木邦宝井孟密隴扛陶孟掃硬罕送法	18	18
19. 緬甸宣慰使司卜刺浪	19	19
20. 雲南緬甸軍民宣慰使司卜刺浪	20	20
21. 緬甸軍民宣慰使司	21	9
22. 雲南緬甸軍民宣慰使司卜刺浪差来頭目打憂速等	22	—
23. 木邦宝井孟密隴扛掃硬罕送法	23	—
24. 緬甸宣慰使司金楼主卜刺浪	24	—
25. 奴婢是滿刺加国差来進貢金葉表文的頭目	25	—
26. 雲南木邦軍民宣慰使司土官妻罕門掌印舍人	26	—
27. 守備孟定府舍人罕郭法并頭目罕鳩等	27	—
28. 木邦宝井孟密孟木隴打〔原文ママ〕奴婢曩罕弄思柄法	28	—
29. 緬甸金楼主卜刺浪宣慰使	29	—
30. 木邦軍民宣慰使司宣慰罕落法妻曩罕門	30	—
31. 雲南緬甸宣慰使司卜刺浪	—	—
32. 雲南緬甸軍民宣慰使司打憂速	—	—
33. 緬甸卜刺浪莽的刺招賀罕等衆頭目差使臣	—	—
34. 雲南緬甸宣慰使司卜刺浪差来頭目打憂速等	—	—
35. 木邦宝井孟密隴扛陶孟掃硬罕送	—	—

来文のうち上記の三本あるいは二本に共通するものを比較してみると、その漢文面とビルマ文字面は基本的に同じであり、大きな異同はない。漢文面については、各本とも半葉7行、各行14字であり、皇帝や朝廷に関する特定の語が現れる時にその前で改行し行頭を一字あるいは二字上げる処置（擡頭）の異なりが散見される。文字の異同については、東洋文庫本と『西域同文表』本は数字に大写（壹、貳、參、…）を用いる傾向が強いのにに対し内藤本は通常の「一、二、三、…」を用いる傾向が強い、といった差異がある。その他、勅と勅、修と脩の類の異体字の異同もあるが、ここに詳しくは述べない。脱字については、「緬甸宣慰使司奏」で始まる来文（西田（1972）の第十六通（東洋文庫本）、西域同文表本も同じく第十六通、内藤本では下巻第十六通）の四行目末尾にある「赴」字が、内藤本では脱落している。

西田（1972）の漢文面には、僅かに誤植がある。筆者が気づいた範囲内では次の二箇所である。

第二通（166頁） 漢文面三行目（原文五行目） 雲南布至司 → 雲南布政司

第二十六通（186頁） 漢文面三行目（原文四行目） 黒齒刺墨 → 黒齒刺墨

3. 『緬甸館訳語』に用いられるビルマ文字及びそのローマ字転写について

『緬甸館訳語』のビルマ文字は、現在のビルマ文字のような円形ではなく方形をしている³。岡野（2007）によると、『緬甸館訳語』に用いられたビルマ文字は、形状の上で12世紀から15世紀までのビルマ文字資料（碑文・墨文）と類似するものや、それらと異なっているものが見出されるが、多くがミャンマー国内に残されている文字と一致し、ビルマ文字として決して特殊なものではないとのことである。岡野（2007: 55）は、『緬甸館訳語』の字形が、同時代のミャンマー国内で書かれた碑文などの文字よりも「新しい」特徴を有していることを指摘し、保守的な碑文文字に対して、当時ミャンマーで日常使われていたがミャンマーの気候条件などの原因で資料としては失われてしまった革新的な字形が『緬甸館訳語』に保存されているという見方を示して、「緬甸館訳語の文字は15世紀当時の文字状況をよく反映している可能性が高い」と結論し、この資料の文字変遷史上の価値を高く評価している。

西田（1972）は、乙種本のビルマ文字を「緬甸文字」と称している。便利なので、以下本稿でもこの呼称を使用する。

本稿で用いる緬甸文字のローマ字転写は、基本的に西田（1972）の方式を採用するが、

³ 岡野（2007: 50）によると、ビルマ文字の子音字が方形になるのはインワ期（14～16世紀）である。但し同時期、母音記号は円形になるという。あらゆる文字が今日の如き円形になるのはコンバウン期であるという。

本稿筆者の作業の都合及び印刷の便利のため、次のような僅かな変更を加えている。

ŋ → ng ; ñ → ñ ; ɔ → â ; m̄ → m

また、有気音字母について、西田（1972）では h を用いて表しているが（例：kh, th, ph 等）、本稿では、後述する介子音としての h- との区別を明確にするため、「´」を用いる。

西田（1972）の転写には、次のような特徴的な処理が見られる。

1) 開音節における長母音 uu (u 符号の右下に一点を打った形) を、西田（1972）は系統的に u と（短母音に、すなわち点を無視して）転写している。

2) “事”などの音写に見られる「i 符号+u 符号+末子音 -w」について、西田（1972）は、“使”などの音写に見られる「i 符号+u 符号+末子音 -w」と区別せず、どちらも ow と転写している。また、“入”の音写に見られる「i 符号+uu 符号」について、西田（1972）は、o と転写し、字形の右下にある点を無視する。

3) 介子音（次章4.1参照）h- が、西田（1972）では時折転写されていない。

4) 「u 符号+ -m̄(anusvāra) + -m」を、西田（1972）は単に -um と転写している。

本稿では、1は uu、2の「i 符号+u 符号+末子音 -w」は oow、「i 符号+u 符号+末子音 -w」は ow、「i 符号+uu 符号」は oo とそれぞれ転写する。4は、もとの綴りに忠実に、-umm と転写する。

「介子音 h-+w」については、西田（1972）は hw と転写しているが、本稿では h-w と転写し、「h+介子音 w」ではないことを強調する。

他にも、個別の用例について、西田（1972）の転写に必ずしも従わなかったところがある。緬甸文字面における諸本間の異同は、母音 i, u の長短や介子音 h-, -w- の有無に関するものが散見される。清代の西域同文表本は他の二本と比べ、誤記（字母の取り違え・脱落・不適切な添加など、緬甸文字の構造をある程度知っている者が起こしたと考えられる誤記）が多い。音写の漢語基礎方言の音韻体系の異なりを反映していると解釈できる異同は非常に少ないが、例えば東洋文庫本第二十六通及びそれに相当する内藤本下巻第二十六通に見える“永”字について、東洋文庫本は yung に作り、内藤本は yun に作るなどは、-ng と -n の食い違いを示すので重大である（永：yun は、内藤本のみ収録された第三十三通にも見える）。但し、内藤本においても、別の二か所ではこの字を yung と音写している。

4. 『緬甸館来文』における漢語音表記の分析

4. 1. 緬甸文字による漢語音節表記の基本構造

緬甸文字によるビルマ語表記の詳細については西田（1972）に譲り、ここでは緬甸

文字による漢語音表記のシステムについて簡単に述べる。

『緬甸館来文』に出現する漢語の音節綴りは、おおむね

(h) + C₁ + (y) + (w) + V + (C₂)

の形式にまとめられる。括弧に入れた成分は任意であるが、C₁とVは必須の要素である。C₁は音節初頭子音で、来文では19種が現れる。本稿では、後で説明する「介子音」との対比上「基本子音」と呼称することがある。Vは母音で、緬甸文字ではC₁の上下左右に置かれた母音記号によって表される。母音符号が置かれなない場合は、インド系文字の通例通り、inherent vowelのaがC₁の後ろに挿入される。C₂は末子音で、-ng, -ñ, -n, -m, -k, -c, -t, -p, -wがその位置を占める。

C₁の前のhと、C₁の後ろのy, wは介子音と呼ばれ、C₁と結合して子音群を構成する。介子音は任意で、また二つ以上が併用されることもある。漢語音表記においては、yがi介音、wがu介音、ywがy介音にそれぞれ当たる場合が多いが、例外が少数あり、特にC₁がc, c', sの場合に、yとの共起関係が複雑で不規則なものとなる傾向があるほか、C₁が唇音p, p', m, wの場合は、音韻の意味を有しないwの添加が見られる。前置子音的介子音h-は、雑字のビルマ語表記においては鼻音や流音の無声化を表すが、来文の漢語音表記においては、明らかにそれ以外の機能を持っている。比較的はつきりしているのは結合hp'の場合であり、ビルマ語にあつて漢語にはない子音/f/の表記に用いられている。その他の場合は、その機能があまりはつきりしない。

その他、特殊な結合がある。まず、雑字のビルマ語音表記には頻繁に現れる介子音-r-が、来文では次の二例にのみ現れる：

克：k'ra；数：sruu

うち“克”は非漢人系の人名の表記に現れるもので、純粋な漢字音表記ではないかもしれない。

また、これは極めて異例であるが、頭子音が上下に二つ重なった上に介子音h-がついたs-h-c'iiという綴りがあり、“時”字の表記のみに出現する。

4. 2. 声母

まず、来文の漢語音表記に用いられた〔頭子音+介子音〕を全て列挙する。

p(py, pw) p'(p'y, p'w) m(my, mw, hm) hp'(hp'w) w(ww, h-w)
t(ty, tw, ht, hty) t'(t'y, t'y) n(nw, hn) l(ly, lw, hl, hly, hlyw)
c(cw, cy, hc, hcw, hcy) c'(c'w, c'y, hc', hc'y, hc'w) ñ s(sw, sr, sy, syw, hs, hsy, hsyw)
s-hc'
r(hr, hrw) y(yy, yw, h-yy)

k(ky, kw, kyw, hk, hkw) k'(k'y, k'w, k'yw, hk'w) ng(ngw)

h(hy, hw, hh, hhw) ·(·y)

介子音を含む形が多く、一見すると大変に複雑な様相を呈している。実際のところ、介子音の機能を確定することは、この漢語音表記システムの解明にあたっての中心的な課題の一つであると言える。

『来文』に出現する緬甸文字と漢語声母の対応関係を表3に示す。hp' と hr を除き、介子音については捨象している。「漢語音」は、緬甸文字表記から推定される漢語の音価である。この段階ではその詳細な音声を明らかにしがたいが、実際のところ、緬甸文字の c, c', s に対応する漢語声母を除くと、問題はさほど多くない。おおむね、明代官話の声母体系として典型的なものであると思える。

表3 緬甸文字と漢語声母との対応

緬文	漢語音	古声母
p	/p/	幫, 並仄
p'	/p'/	滂, 並平
m	/m/	明
hp'	/f/	非, 敷, 奉
t	/t/	端, 定仄
t'	/t'/	透, 定平
n	/n/	泥, 疑
l	/l/	来
c	/ts/	精, 從仄
	/tʂ/	知, 章, 澄仄
c'	/ts'/	清, 從平
	/tʂ'/	初, 昌, 崇平, 澄平, 禪平, 船平

s	/s/	心, 邪
	/ʂ/	生, 崇仄, 書, 禪仄, 船仄
r	/ʃ/	日
hr	/ʂ/	船仄, 書, 生
k	/k/	見, 群仄
k'	/k'/	溪, 群平
ng	/ŋ/	疑, 影, 云
h	/h/	曉, 匣
·	/·/	疑, 影, 喻, 微
y	/·/(齊撮)	疑, 影, 喻
w	/·/(合)	疑, 影, 喻, 微

4. 3. 声母の問題点 (歯音系以外)

4. 3. 1. 尖団音

ごくわずかだが、尖音と団音の混同と関係があるかもしれない例がある。

酒 (精母) : kyow

取 (清母) : hk'wii

下 (匣母) : syaa

前二者は尖音字の表音に軟口蓋子音字母 k, k' が用いられた例で、後者は団音字の表音に歯音字母 s が用いられた例である。尖団音の境界が侵された例は全体を通じてこの三例だけであり、決して主流ではない。

4. 3. 2. ng 声母について

ビルマ語には音節初頭子音としての ng- が存在し、字母も備わっている。

中古の疑母字は、本資料では大部分がゼロ声母としての y, w, · を頭子音に持っているが、次の字は何らかの子音を帯びている。

我 疑哿上一開・果 ngã

議 疑寘去三開・止 ne

牛 疑尤平三開・流 lyuu

次の疑母字は、現代北京では n 声母を持つにもかかわらず、来文ではゼロ声母相当である。

逆 疑陌入三開・梗 yyii

次の字は、疑母字でないにもかかわらず、ng- 声母を帯びている。

鞍 影寒平一開・山 ngam

安 影寒平一開・山 ngan

恩 影痕平一開・臻 ngon

位 云至去三合・止 ngwe

西田 (1972: 199) は、上掲の例の多くがそうであるような「漢語の ·- に ŋ- n- があてられる場合」について、「これは対象となつた漢語が、当時なお ŋ- を保存していたためとは考えられず、おそらく雑字でなされた緬甸語の漢字表記から類推して、たとえば、雑字で緬甸語 ŋaa を我で、ŋan を安で表記するなどから類推して、とられた転写法である可能性がつよい」と述べている。確かに、西田氏が指摘するような、雑字の音訳法からの類推によると見られる緬甸文字綴りは、後に見るように、来文の中に数多く発見できるが、ここで西田氏の挙げている“我”“安”の例は正確でない。雑字で ŋaa 音節の音訳に用いられている漢字は“我”ではなく“阿” (例えば632「五」⁴) であり、ŋan 音節の音訳に用いられている漢字は“安”ではなく“奄” (例えば168「鷺」) である。実際のところ、上掲の漢字で、雑字中に同じ対音関係が見つけられるものは、位 : ngwe しかない (例えば、414「櫟」)。このため、来文で緬甸文字 ng- が表記されているものは、“位”を除き、来文の編纂者が、雑字を参照することなく施したオリジナル表記である可能性が高い。

また、同じ明代の『西儒耳目資』が描写した官話音には「同鳴字父」g (額) が存在し、これは ŋ 声母であったとされる (中古来源は必ずしも疑母ではない)。また、疑母の細音字には n (擲) を取るものもあり、例えば“議”字は、『西儒耳目資』で

⁴ 雑字の用例に附した番号はその語彙項目の通し番号である。以下同じ。

はまさに ni (第三摂去声「擲易」) に作っている。現代北方漢語にも、ŋ- を声母としてもつ方言や、疑母細音字に n- が残存する例は少なくなく、北京語にさえ、「虐」nüè、「逆」ni、「牛」niú などの例が存在している。このようなわけで、本稿筆者は、緬甸館来文の ng- 表記 (及び、「議」の n- 表記) は、現実の漢字音の ŋ-/n- 声母を表記した可能性が高いと見ている。それが必ずしも中古の疑母に由来しない点もまた、『西儒耳目資』や現代北方官話と同じである。

4. 3. 3. その他の小さな問題

“年” (泥先平四開・山) は ñaň と表記される。これは来文に出現した ñ- 声母の唯一の例である。ň は硬口蓋鼻音 [ŋ] であり、“年” 字の i 介音に先立つ n を表したと容易に理解できる。

4. 4. 介子音の問題点 (齒音系以外)

既に述べたように、介子音のうち y は漢語の i 介音、w は同じく u 介音、yw は同じく y 介音にそれぞれ当たる場合が多いが、一部に論ずべき問題が残っている。中でも齒音 c, c', s と介子音の結合は問題が多いので、まず先に齒音以外の子音と介子音との結合の問題について述べる。

4. 4. 1. y について

介子音 y が、母音 i, ii と結合する場合がある。例えば：

近 kyin；緊謹 kying；遺・yii；逆 yyii；陰飲 yyin；引 yying；黒 htyii (誤記)；享香向 hying (誤記?)

これらは、-y- がなく、基本子音から直接 i, ii が続く場合との書き分けの条件を見出し得ず、音韻的価値を担っていないと見られる。但し、雑字のビルマ語表記には (y+i) のような組み合わせが存在しないので、漢語音を正確に表記しようとした努力であったのだろう。

-y- にはこのほかにも、漢語音の側に音声的に対応しない例がいくつかある。次章で韻母について検討する際に、その具体例は明らかになるであろう。

4. 4. 2. w について

介子音 w も、母音 u, uu と結合する場合がある。例えば：

副 p'wuu (p'uu に作る例もあり)；兀 wwuu；右 ywuu；聞 wwun；捧 p'wun；朋 mwung (誤記)；功恭 kwun

また、唇音声母に w が続く例もある。例えば：

p'wai 牌；p'wam 叛；mwe 每；mwan 蛮；mwam 満；hp'waa 法発；hp'wan 番反犯；hp'wang 方

これらの -w- も、特段の音韻的価値を担っていないと見られる。但し“毎” mwe については、あとで議論する。唇音字以外の場合でも、“来” lwai (来哈平一開・蟹) のように、-w- が漢語音の側と音声的に対応しない例がいくつかある。

4. 4. 3. yw について

yw は漢語の y (撮口) 介音に相当すると見られる場合がある。例えば：

遠 云阮上三合・山 ywan

廬 来魚平三合・遇 hlywi

一方で、-w- や -y- が撮口介音に相当する場合もある。

靴 曉戈平三合・果 hhwac

員 云仙平三合・山 wañ

全 従仙平三合・山 c'yan

撮口介音を -yw-、-w-、-y- のいずれで表すかについては、明確な条件付けは発見できず、表記の揺れと見るべきであろう。

4. 4. 4. h- について

雑字のビルマ語表記には、h- を冠した子音結合

hng, hñ, hn, hm(hmy), hr(hrw), hl(hly), h-w, hsy

が存在する (西田 (1972: 33-36))。現代ビルマ語では、h- は鼻音・接近音の無声化を表す。上に挙げられているうち結合 hsy が出現する語は、「八」hsyac (635等) のみで、この語は現代ビルマ語では hrac と綴られる。

一方、『来文』には、次の結合が現れる (歯音系との結合を除く)。分類して示す。

①『雑字』にも現れる結合

hm- (帽 hmāk、皿 hmin、蒙 hmong)

これらは明母字で、通常、h- のない m- で表記される。この三字の表記に h- が附された理由は不明である。

hn- (乃 hnai、囊 hngang)

泥母字。通常、単純な n- で表記される。h- が附された理由は不明である。なお、hn- の二例はいずれも非漢人系の人名表記の例である。

hr- (少 hrwāk、紗沙 hrak、hrii 食)

書生船母。雑字において、結合 hr- は緬甸語の音素 /ʃ/ に該当するとされ (西田 (1972: 56))、音訳漢字には「少沙食稅舍」など、やはり書生船母字が用いられる (一方、h のない r- は、日母字で音訳されるのを原則とする)。そのため、表音に hr- が用いられたことは理解できる。

hl- (列 hlanh、廬 hlywi、另 hlyong、酋 hlyuu⁵)

“酋”は従母字で、西田（1972: 167）は「syuの誤写」とする。字母 l と s は形が似ているので、本稿でもひとまず西田説を採って、これ以上議論しない。他は来母字である。来母字は、通常 h- のない l- で音訳される。上掲三字に h- が附された理由は不明である。

h-w-（化 h-wak、緩完 h-wañ、往 h-wang）

“化”は曉母、“緩完”は匣母、“往”は云母（いずれも合口）。合口のもとで、曉匣母字は hw-（h が基本子音で、-w- は介子音）、云は h- のない w-（この w は基本子音）でそれぞれ表記されるのを通例とする。

②『雑字』には現れない結合

hk-（hkaw 鍋、hkaw 告⁶、hkyañ 艱、hking 斤）

hk'-（hk'wii 取）

ht-（htyii 黒——誤記、htii 狄）

h-y-（h-yyac 夜）

hh⁷-（hhwac 靴、hhii 喜、hhwan 歡喚換）

以上の①と②を通じ、hr- が書生船母に対応するのを除き、h- がいかなる表音上の機能を持つのか、よくわからない。②の結合は『雑字』に見えないので、漢語音の何らかの特徴を強調する意図があったと思われるが、その意図は不明である。

4. 5. 介子音の問題点（齒音系）

来文の漢語音表記に現れる緬甸文字の齒音系字母 c, c', s と介子音 y, w, h との結合は厄介な問題である。問題の根源は、西田氏が「厄介なのは、漢語では ts-, tʂ- の二系列の対立があつたのに対して、緬甸語は c 「tʂ」一系列しかもたなかつた点である」（西田（1972: 198））と述べている点に尽きる。来文の編者は、中古来源上知組（二等・三等）・章組・莊組・精組からなる漢語の複雑な歯擦音を、緬甸文字の c, c', s と介子音 y, w, h, まれには r の組み合わせを使って、できる限り正確に表記しようとしたが、結果としては、かなり混乱した表記様相を招いている。いくつかの場合に分けて説明する。

4. 5. 1. 知章莊組（破擦音系）

このグループは対音が比較的安定していて、介子音のない c, c' で表記されるのを通例とする。例は任意に、緬甸文字音節綴りベースで最大三つまでを挙げる。

（知母）知 cii、珍 cin、竹 cup:（徹母）勅 c'ii:（章母）者 cac、之枝 cii、州舟 cow:（昌母）

⁵ 但し西田（1972）は、「列」を除く各字において h- を転写せず、それぞれ、lywi、lyong、lyu（短母音）としている。

⁶ 西田（1972: 176）は kuw と転写し「kaw の誤写であろう」とする。

⁷ 最初の h が介子音で、二番目の h は基本子音。

車 c'ac、赤 c'it、出 c'ut；(莊母) 捉 cau、盞 can、争 cing；(初母) 差 c'aa、c'ai、初 c'uu；
(澄母仄声) 住 cuu、着 caw、朕 con；(澄母平声) 朝 c'aw、程 c'ing；(崇母) 鐺 cǎ

但し、合口韻で、u 介音の glide を表すために -w- が現れる場合がある。

(知母) 搗 cwaa、転 cwan；(澄母) 篆 cwan

u 母音の直前に立つ音韻論的に無意味な w も若干ある。

(章母) 珠主 cwuu、准 cwung；(澄母仄声) 重 cwun

説明のつかない -w-：(崇母仄声) 寨 cwai

介子音 -y- が現れるのは章母の“旨” cyii 一字のみであり、h- が現れるのは知母の“長” hcang、澄母平声の“伝” hchwan、昌母の“齒” hc'ii のみである。

雑字において緬甸語の c-, c'- を表記する音訳漢字もほぼ全て知章莊組の破擦音系の字であることから見て、来文の編者にとって、知章莊組の破擦音系の声母は、ビルマ語の c, c' とほぼ同質の音声だったようである。そのため、h- や -y- を付け加える必要もほとんど感じられなかったのである。

4. 5. 2. 精組一等

このグループも知章莊組(破擦音系)同様、介子音無き c, c' で表記されるのを通例とし、合口韻の u 介音の glide を表すために -w- が用いられる。例えば：

(精母) 左作 cwǎ、走 cow、総 cun；(清母) 催 c'we、草 chǎw、寸 c'un；(從母仄声) 在 cai；(從母平声) 曾 c'ing；(心母) 撒 saa、蘇速 suu、孫 sun

-y- が出現する例外は五つある。

(精母) 奏 cyow、尊 syum；(清母) 綵 c'yai、參 syan；(從母平声) 纜 c'yai

h- が用いられた例はない。

注意すべきは、精組一等の破擦音系字は、雑字の音訳漢字としては極めてまれにしか現れないということである。ビルマ語の側に、スー音系の破擦音 ts, ts' が存在しないからである。存在しないが、来文においては緬甸文字 c, c' をもって表記するのが適切であると見られて、特に介子音を追加することはなかった。

4. 5. 3. 精組三四等

このグループは y や h (あるいはその両方) を帯びるか、直後の母音が i, ii, e であることが多い。例えば：

(精母) 雀 c'yǎ、子 cyii、濟 hc'yii；(清母) 此 hc'i~hc'ii、千 hc'an、青 chyong；(從母仄声) 字自 cyi、就 hc'yow、尽 cin；(從母平声) 前錢 c'yan、情 c'ing、全 c'yan；(心母) 写 hsyac、司 sii、省 hsin

y と h は、雑字のビルマ語表記では、色：hsyac を唯一の例外として、齒音系子音とは結合しないので、本グループで介子音 y, h をしばしば用いるのは、ビルマ語には

存在しない漢語音の口蓋化した ts, ts', s を表そうとする意図があったのであろう。

4. 5. 4. 章莊組（摩擦音系）

このグループは現代北京語では sh[ʃ] 声母に相当するが、来文での緬甸文字との対応関係は混乱を極め、実に15通りもの対音形式が存在する。ここでは、紙幅の関係で、その具体例を挙げることをせず、緬甸文字表記と中古声母との対応関係の統計表を示す。

表4 章莊組（摩擦音系）を表記する緬甸文字

	s	sy	sw	syw	c'y	c'w	sr	r	hs	hsy	hsyw	hcy	hc'	hr	hsc'
書	2	3	3	1	2					7	1		1	1	
禪	4	5			2	1				1		2			1
船								1		1				1	
生	2	1	3				1		1	1				2	
崇	1														
計	9	9	6	1	4	1	1	1	1	10	1	2	1	4	1

対音形式の C₁（基本子音）別に用例数を整理すると

s : 38, c : 2, c' : 6, r : 5, sc' : 1 計 : 52

となり、全体の73.1%をsが占める。

雑字では、章莊組摩擦音字：hr という比較的明瞭な対応関係がある。例えば

（生母）沙：hrak; rwaā; （書母）舍：hre, hrañ; （書母）説：hre; （船母）食：hrii; （書母）少：hrwāk

などである。これに対して、来文の章莊組摩擦音字が必ずしも hr と対応せず、多様な対応関係を示すのはなぜであろうか。このことは、緬甸語の hr- が漢語の章莊組摩擦音（今、/ʃ/ で表す）に比較的近い音であると捉えられている一方、漢語の /ʃ/ は緬甸語の hr とはあまり似ていると見做されず、緬甸文字による表音に相当程度に苦勞するような「異質な」音であったことを示している。中でも、“時”（禪母止摂）に限って現れる hsc'ii という特殊な綴りは、表音者にとっての異質性をよく表している。/ʃ/ が誰にとって異質であったかと言えば、それは当然、緬甸人にとって異質だった。このことから考えて、来文における緬甸文字による漢語音表記は、主として緬甸人の手によってなされたものようである。

4. 6. 韻母⁸

4. 6. 1. 無韻尾類

① a 類。

1) a (短母音)

a/a/⁹: 克 k'ra (入声曾一開); 阿·a (音韻地位不明)

ya/ia/: 仮 kya (仮二開)

2) aa(長母音)

aa/a/: 把 paa、馬 maa、他 t'aa、拿納 naa、差 c'aa…——仮二開、果一開、入声山咸一二開；梗二開（“打”字：taa）

yaa/ia/: 殺 hsyaa、嘉 kyaa、下 syaa、牙衙 yaa ——仮二開（牙喉音）；入声山二開（“殺”字）

waa/ua/: 搗 cwaa、花 hwaa、法發筏 hp'waa ——仮二合、入声山咸三（輕唇音 /f/）

② ǎ 類。

ǎ: I /o/, 可 k'ǎ、我 ngǎ、鐳 cǎ、合 hǎ ——果一開、入声諸韻（江二開、咸一開）；II /au/, 猫 mǎ、到 tǎ、討 thǎ ——効一開

yǎ: I /io/, 雀 chyǎ ——入声宕三開；II /iau/, 調寫 tyǎ ——効四開

wǎ/?uo/: I 左作 cwǎ、顆 khwǎ、奪 twǎ ——果一開合、入声諸韻（山一合、宕一開）
緬甸文字表記 ǎ に対しては、I、韻尾ゼロの /o, io(, uo)/ と、II、韻尾 -u を伴う /au, iau/ の二つの韻類を推定する。/o/ と /uo/ の区別があったかどうかは不分明である。

雑字の音訳には、I のグループの表記対象である果一開合及び入声の江二開、山一合、宕一開、宕三開、咸一開などの諸韻の字は一切用いられていない。雑字において、ǎ によって表される緬甸語音の表記に用いられたのは常に効撰字、即ち II のグループの字であった。このことは、ǎ によって表されるビルマ語音が、単母音の [o] ではなく二重母音 [au] であったことを物語る¹⁰。来文において ǎ が I グループの諸韻を表すのは、二重母音 [au] を借りて、ビルマ語にはない漢語の [o] を表記しようとしたのに他ならない。

③ e 類。

e: I /e/, 這 ce、舍 hre ——仮三開（正齒音）；II /i/, /i/ (舌尖母音)/、只 ce、次 c'e、力立 le、幣臂被備 pe、議 ne ——止蟹三開、入声諸韻（曾三開、深三開）

ye: II /i/, /i/ (舌尖母音)/、世勢 c'ye、迄隙 k'ye、已 kye、廝死 sye、意 ye ——止蟹三開、

⁸ 以下、用例は緬甸文字音節綴り五つまでを挙げ、それ以上例がある場合は「…」を付けて省略する。中古の韻撰は略記に従う。例えば「仮二開」は「仮撰二等開口」の意。

⁹ 以下、想定される漢語音を // に包んで示す。

¹⁰ ǎ(ǎ) を二重母音に再構すべきことについて、西田 (1972: 77-78) を参照。

入声諸韻（臻三開、梗三開）

we: Ⅲ /uəi/, 毎 mwe、対 twe、醉 cwe、揮回会 hwe、為 we、…——蟹一合、止蟹三合
ywe: Ⅱ /y/, 具拋 kywe —— 遇三合; Ⅲ /uəi/, 水 hsywe —— 止三合

緬甸文字の e は複数の漢語音の表記に利用された。Ⅰは正歯音の条件下において現れ、高めの前舌非円唇母音 /e/ を推定する。ⅡにはⅠよりも狭い主母音 /i, i/ (開)、/y/ (合) を想定する。緬甸語には舌尖母音は存在しなかったから、舌尖母音は表記上 /i/ と同じ扱いとなる（この点、西番館訳語の漢語音表記も同様である。更科 (2023: 71) を参照。但し緬甸館来文では、後に述べるように、[ɿ] の一部は時折区別された）。Ⅲには合口韻 /uəi/ の“韻基” /əi/ を想定する。

e の音価の分裂は、雑字でビルマ語音を表記した音訳漢字においても全く同様に観察される。

Ⅰの平行例：舍 hre (275「前」、這 ce (505「襯衣」彎籠～, wan lum～)

Ⅱの平行例：賦 ne (5「日」、力 le (17「風」、只 ce (327「差去」～耍, ～swaa)、細 se (456「酒」、巨 kywe (335「侍奉」六～, lup～)、…

Ⅲの平行例：銳 re (54「水」、内 nwe (91「春」、盃 khwe (164「犬」、隨 swe (534「血」、…

緬甸館訳語の -e, -we は、西田 (1972) によって、中古ビルマ語の *-iy (340頁)、*-uy (344頁) にそれぞれ由来するとされる。西田氏は、「雑字」のこれら音訳漢字を根拠にして、-e に対して /ei/ と /ii/ の二通りの形式を再構し、上掲の平行例のうち、Ⅱの -e には /ii/ を、Ⅰの -e には /ei/ を与えている (-we には /wei/ のみを再構している)。また、Ⅱの“巨 kywe” には、/jwii/ ではなく /jwei/ を与えている)。但し、この二様の形式について、西田氏は、Tavoy 方言での似たような現象を指摘するにとどまり（すなわち、単に Tavoy 方言にも *iy に対して -ey と -ii の、*uy に対して -wey と -uy の両様の対応があると指摘しているに過ぎず）、具体的な語項目を挙げ『緬甸館訳語』と Tavoy 方言を含めた他の資料の具体的語形を比較し、音韻対応を検証することまではしていない。結論的には、*iy > -ii, -ei について、「この（引用者注：Tavoy 方言の）2形式は辨別された原初形を反映しているのではなく、-iy から -ey への変化の両段階を代表しているものと考えらるべきである。緬甸語 A および B (引用者注：緬甸語 A は『緬甸館訳語』の乙種本、すなわち本稿が扱っているテキストの言語で、緬甸語 B はその丁種本、すなわち清乾隆年間に編纂されたケンブリッジ本の言語) も同様な状態にあつた。共に基本的には -ii, -ei の二形式を対応させ、その二形式の間に特別の辨別条件はなかつた」と述べている（西田 (1972: 341)）。これは、音訳漢字の書き分けを、再構形としては一応 /ii/, /ei/ として反映させつつも、緬甸語の音韻史の流れからはひ

とまず切り離しておくという処理であるが、音訳漢字の書き分けが、ビルマ語の音形式の区別の反映ではない可能性も考えられる。すなわち、上記Ⅱについて、Iの /ei/ から区別された /ii/ ではなく、依然として /ei/ であったが、/nei//lei//cei//sei/ にうまく適合する漢語の音節がないために、「膩力只細」などの /i/ 韻母音節を用いた可能性がある。

来文においても、止三開や遇三合の韻母の表記に e, ye, ywe が用いられているのは、ビルマ語の母音 /e/ がかなり狭い母音であったことを示す。但し、止三開の精組「廝死」に -ye が用いられているのは、音声的には奇妙である。漢語のこの音韻地位の韻母は、舌尖母音 [ɿ] で発音されたと考えられ、前舌狭母音からはかけ離れているからである。また、sye に見られる s と y の結合はビルマ語側にはなく¹¹、かつ雑字において緬甸文字 e を含むいかなる音形式も、舌尖母音 [ɿ] を持つと考えられる漢字に音訳されてはいない。従って、sye は雑字の音訳関係からの単純な類推の結果ではあり得ない。sye という表記は、来文の編纂者が、雑字においてビルマ語の e や ye 表記が止三開字でしばしば音訳されることから類推して緬 -(y)e : 漢 /i/ という対応関係を帰納した上で、舌尖母音 [ɿ] を /i/ と同一視する、ということがあって初めて出てくるものである。

④ i/ii 類。

緬甸文字の短母音 i と長母音 ii の形状には明瞭な差異がある。来文の漢語韻母表記としては、-i よりも -ii の方が頻繁に用いられる。但し、両者の間に対音上の差異は見いだせないので、ここではまとめて扱う。

i(ii) : 離礼里理裏 lii、指紙至治致 ci、耳爾 ri、欺其起氣器 k'ii、食 hrii、……—止三開、蟹四開、入声諸韻（曾三開、梗三四開、臻三開、深三開）

yi(yii) : 字自 cyi、濟 hcyii、十拾 syi、以 yi、夷益訳亦 yii、……—止三開、蟹四開、入声諸韻（梗三開、臻三開、深三開）

wi(wii) : 署 chwi、女 nwi、取 hkhwii、於与 wwii、……—遇三合；蟹一開（“貝”字：pwi）

ywi(ywii) : 廬 hlywi、居 kywii ——遇三合

i(ii) と yi(yii) は中古音韻類の対応がほぼ重なっており、同じく /i/ 及び /i/ (舌尖母音) 韻母を表したと見られる。

『緬甸館来文』の漢語音は、現代北京語などと同じく、すでに舌尖母音 [ɿ]、[ʅ] から成る単母音韻母を有していたと考えられるが、緬甸文字表記上は舌面母音 [i]

¹¹ 西田 (1972: 58) は乙種本『緬甸館訳語』のビルマ語において、「y は C₁の位置にある k, kh/ p, ph, m/ l/ hm, hl, y とのみ結合する」と明瞭に述べている。

と区別がない。

所謂“児系列字”¹²、すなわち止撰開口の日母字は、来文の漢語音表記では ri と表記されるほか、riw と表記された例がある。

耳爾 ri；児二 riw

一方“日”は、rii と表記される。

これは、本資料において、児系列字が、『中原音韻』においてそうであったように、未だ零声母化していない段階を示しているとも考えられるが、緬甸語に [əɪ] のような音節がなかったので、表記上、r- を音節初頭音とする他なかった可能性もある。「児二」の表記に -w というやや irregular な韻尾がついているのは、そり舌音韻尾を写そうとした努力の表れではなかろうか。

ii 表記を取る唇音字には、

婢 pi、眉 mii~mi 【以上止撰】；畢 pi、必 pii、匹 p'ii、密 mii 【以上入声】

があり、e 表記を取る

毎 mwe、幣 pe 【以上蟹撰】；臂被備 pe 【以上止撰】

との区別が問題になる。現代北京語では、「眉每備」が /ɔi/ 韻を取り、「婢畢必匹密幣臂」は /i/ 韻を取っている。本資料の注音方式では、すでに見たように e が止撰の領域にまで食い込んでいるため、“毎” mwe が /muəi/ もしくは /məi/ を表した可能性が極めて高いほかは、全て /i/ を表した可能性がある。「被備」も /pi/ に読んだ可能性が出てくる。

wi(wii) と ywi(ywii) は中古音韻類の対応がほぼ重なっており、同じく /y/ 韻母を表したと見られる。ビルマ語には前舌円唇母音 [y] が存在しないため、w で円唇要素を表し、i(ii) で前舌要素を表すという分析的表記になっている。ここにおいて、主母音に u ではなく i が選ばれていることから、本資料では、遇撰三等字が [iu] や [u] ではなく [y] になっていると推測できる。表記例のうち暑 chwi、庶 swii の二字は、現代北京語では /u/ 韻母を取っているが、本資料では /y/ 韻母を取っていたと考えなければならない。

貝 pwi は特殊で、wi(wii) 表記中唯一の蟹撰字である。結合 pw- は、雑字のビルマ語表記の中には数語に見えるが、来文の漢語音表記ではこの一例しかない。この表記が /puəi//poi//pi/ のいずれを表したかを決定することは難しい。

⑤ u/uu 類。

短母音 u の表記と認められるものは

¹² 李思敬 (1986: 1) 参照。

国 ku (入声徳韻一等合口・曾撰)

の一字のみであって、それも『西域同文表』本では長母音 kuu に作っている。他は全て長母音 uu であるが、西田 (1972) は何故かこれらの多くを短母音 u に転写してしまっている。

uu : I /u/ 符府撫父付附赴仏負副婦富伏服福 hp'uu、土途 t'uu、路 luu、処初 c'uu、五伍武・uu…——遇一合、遇三合 (舌歯音・軽唇音)、流三開 (軽唇音)、入声諸韻 (通臻一合、通臻三合 (軽唇音))

*他に、“母” muu (流一開)。

yuu : I /u/ 書 hsyuu —— 遇三合 ; II /iəu/、酋 hlyuu、牛 lyuu、留 lyuu、油有 yuu —— 流三開

wuu : I /u/、珠主 cwuu、無悞物勿屋 wuu、兀 wwuu —— 遇一合、遇三合 (歯音・軽唇音)、入声諸韻 (通臻一合、臻三合 (軽唇音))

ywu : II /iəu/、右 ywu —— 流三開

u/uu 類においては、介子音または基本子音 y は、II (流撰) においてのみ音韻的意味を持っており、i 介音を表す ; I における y- は、“書” hsyuu においてのみ出現し、シュー音性を表す修飾要素であると解釈される。また、介子音または基本子音 w は、音韻的意味を有さない修飾要素であると解釈される。

⑤ 'oo 類。

これは、緬甸文字の母音記号 o の右下に一点があるものの仮の転写で、西田 (1972) は認めずに o と転写している。“入” roo (日緝入三開・深) の一例のみがある。今、/u/ を推定する。

4. 6. 2. -i 韻尾類

『緬甸館訳語』の緬甸文字には、子音字 y を韻尾に用いた -y は存在しておらず、代わりに単一の母音符号 òai が用いられている (西田 (1972: 38))¹³。

ai/ai : 拝 pai、待帯戴臺 tai、差 c'ai、該改盖解界 kai、海懈 hai、…——蟹一開、蟹二開

yai/iai : 纒綵 c'yai、皆 kyai —— 蟹二開

* “纒綵” は一等韻であり -y- を帯びるのは不規則。

wai/uai : 牌 p'wai、來 lwai、寨 cwai、快塊 k'wai、壞外 wai、…——蟹一合 (“外” 字)、蟹二合

* “牌來寨” は開口字であり -w- を帯びるのは不規則。

¹³ 『百夷館訳語』の百夷文字は緬甸文字と同系であるが、ここでは ai の他、末尾子音としての -y が用いられ、漢語音表記においても -i 韻尾の表示に盛んに用いられている。更科 (2022a) 参照。

ai 類の対応関係は比較的単純であるが、介子音に若干の不規則がある。牙喉音二等開口字について言えば、“皆” kyai では -y- がある一方、“解界” kai と“懈” hai には -y- がない。実際の漢語音では“解界懈”にも i 介音があったのに表記されなかった可能性が高いが、i 介音のない方言音形が混入した可能性もある。

“壞”（匣母字）の wai 表記は、南方方言（粵語など）の混入かもしれない。

4. 6. 3. -u 韻尾類

① au 類。

au は単一の母音符号に該当する。本稿は西田 (1972: 164) に従って au と転写する¹⁴。鍾 (2010: 148) はこの符号の表す母音を現代ビルマ語の ə の起源の一つであるとし、中古ビルマ語の aw と等価であると見做している。

au : I /au/, 照 cau、好 hau ; II 羅 lau、捉 cau —— 効一開 (“好”)、効三開 (“照”) ; II /o/ 果一開 (“羅”)、入声江二開 (“捉”)

* 熱 hrau は不規則対音、拗 nau は音韻地位不明。

yau : I /iau/, 小 syau、暁 hyau —— 効三四開

wau : II /o/, 箇各角 kwau、所 swau、多 twau —— 果一開、遇三合 (“所”)、入声諸韻 (江二開 (“角”)、宕一開 (“箇”))

ywau : II /o/, 恪 k'ywau —— 入声宕一開

この転写形式は I /-au/ と II /o/ の二つの韻類を表示している。yaw の y は漢語の i 介音に対応しているが、II の au と wau は同じ果一開や入声江二開などを表しており、w の有無が必ずしも中古の開合の対立と対応せず、現代北京語の e 韻母と uo 韻母の区分とも対応しない。

“角”字は見母二等なので近代北方語では i 介音を生じ、-io のような韻母を取ることが期待されるが、表記は kwau で、介子音 y は現れていない。

“恪”字は一等鐸韻開口字であるから、i 介音は期待されないが、それにもかかわらず介子音 -y- を帯びているのは不可解である。

② aw 類。

inherent vowel の a に、末子音 w が結合した形式。初めに言っておかなければならないことは、-aw は雑字におけるビルマ語表記には一切用いられていないということである。それにもかかわらず、来文の漢語音表記には多く用いられている。

aw : I /au/, 刀倒道 taw、勞 law、招勦 caw、掃 saw、高 kaw、… —— 効一開、効二

¹⁴ なお西田 (1972: 164) は、au について、「来文の漢字音転写にのみ用いられる」としている。確かに、東洋文庫本の雑字に au は見られないが、ベルリン本の増補部分に「将」有蕪 yuu hrau という例が見えることを付記しておきたい。

三開（舌齒）；Ⅱ /o/、撥 paw、賀和 haw、糶¹⁵磨模 maw、着 caw、樂落 law、……—果一開合、遇一合（“糶”字）、入声諸韻（宕一開、宕三開、山一合）

yaw：Ⅰ /iau/、表 pyaw、交 kyaw、要 yaw ——効三開、効二開（牙音）；Ⅱ /o/、頗 p'yaw ——果一合

waw：Ⅱ /?uo/、過 kwaw、鍋 hkaw ——果一合

aw 類も、中古韻撰との対応関係が au 類と同じであり、Ⅰ効撰とⅡ果撰・入声宕江山撰に分裂する。

果撰一等には aw 表記と waw 表記の両方が見られる。唇音の例字「磨」を除く残りについて、現代北京語との比較も交えて示す：

	緬甸字表記	中古開合	現代北京
賀	haw	開	he4
和	haw	合	he2
過	kwaw	合	guo4
鍋	hkaw	合	guo1

yaw 韻に一等の“頗” p'yaw が含まれているのは不規則で、-y- を帯びている理由が説明できない。

③ âw 類。

母音表記 â が、末子音 -w と結合した形式。『雑字』には、

「没」保謝 pãw sañ (23)

「萍」保 pãw (724)

の二例のみが見える。来文での使用例も少なく、

âw/au/：草 c'âw 襖包宝 pãw ——効一開、効二開

の四例を数えるのみである。タイプⅠである。

④ iw 類。

母音表記 i が、末子音 -w と結合した形式。『雑字』には存在しない。来文では、すでに述べたが、次の二つの“児系列字”の表記に現れる。

iw/aɪ/：児二 riw ——止三開（日母）

iw という綴りだけを見ると、[iũ] のような音が想像されるが、漢語音韻史の見地から観て、この結合の -w は円唇的わたり音を表したとは考えにくく、単に何らかの「韻尾性」、すなわち音節の末尾に向かっての何らかの調音運動を表していると考えべきである。頭子音に r- があることから、問題の漢語音節に何らかの反り舌的な要

¹⁵ “~糊”として出現。

素が含まれていることは確実である。riw 全体で、[ɤ]のようなある種の反り舌母音(反り舌動作が、音節末尾に向かって強まる)を表記しようとしたものであろう。ビルマ語に [ɿ] のような音節末尾音がないことは言うまでもない。なお“児系列字”には、-w のない ri という表記も併存している(既述)。

⑤ ow, oow 類。

ow は、緬甸文字の o (i を表す符号と u を表す符号の複合) が末子音 w と結合した形式。「雑字」のビルマ語表記においても極めて頻繁に用いられる。一方 oow は、ii を表す符号と u を表す符号との複合から成り、西田(1972)では上記の ow と同一視されているが、本稿では区別して、oow と転写する。

ow : I /əu/、頭 t'ow、楼 low、走昼州舟 cow、狗構 kow、後 how、……—流一開、流三開(“瘦”字)；II /i/ (舌尖母音) /、思四使侍是 sow ——止三開(心生禪母)；III /u/、普 p'ow、做 cow ——遇一合

yow/iəu/ : I 奏 cyow、受寿就 hcyow、收手守修 hsyow、酒九久 kyow、又 yow ——流三開

* “奏”は流撮一等字であり、-y- を帯びていることは説明困難である。

wow/i/ (舌尖母音) / : II 師 swow ——止三開

oow/i/ (舌尖母音) / : II 侍是事 soow ——止三開

* 侍とはには、sow、soow 両様の表記が併存している。

タイプ II の /i/ が興味深い。本資料の漢語では [sɿ] と発音されていたと考えられる。西田(1972)は、“師”が swow[suəu] と転写されることについていぶかり、同時に、「百夷館来文に見られる漢字音転写がその解決に重要な資料を提供するであろう。その問題は他日考察してみたい」(西田(1972: 210))と述べている。遺憾ながら、その後の西田氏による考察は管見には入っていないが、百夷館来文の漢字音転写は、-ow 表記の問題に関して、確かに重要な手がかりを与える。

百夷語はタイ系の言語であるが、百夷語を表記する文字(百夷文字)はビルマ文字の系統であり、『百夷館訳語』の百夷文字は、字形や、字素の運用上の特徴において、『緬甸館訳語』の緬甸文字ととりわけ近い関係にある。『百夷館訳語』の百夷文字には、緬甸文字の -ow と字源上平行した -öw という結合があり、百夷語の単母音 /s//w/ を表記する。『百夷館来文』にも漢語音表記が存在するが、そこではこの öw が“司思”の表記に用いられているのである (söw)¹⁶。

4. 6. 4. -m 韻尾類

① am/am 類

¹⁶ 詳しくは、更科(2022a: 144-145)を参照。

am は anusvāra に対する転写で、am (inherent vowel の a に末子音 -m がついたもの) と等価である。来文の漢語音表記では、“然” ram に -am が使われるのを除き、全ての例が am̐ である。一方、雑字のビルマ語表記においても全く同様に、音訳漢字で“然”と表記される ram (「都」然馬 ramma (85)) のみに -am が用いられ、他の /-am/ 音節の表記には全て am̐ が用いられている。ram 音節においてのみ anusvāra が避けられなければならない理由は、音声的にも、字形的にも探し求めにくいので、来文と雑字におけるこの一致様相は、両者の緬漢対音関係の一種硬直的な連絡を物語るものであるといえよう。『緬甸館訳語』の編纂者たちは、雑字における緬甸文字と音訳漢字との関係と、来文漢語音表記における漢字と緬甸文字表記綴りとの関係を、できる限り一致させようとしたらしい。ここでは、am̐ と am を等価のものとして同時に扱う。

am̐(am) : I 三 sam̐、甘 kam̐、勘砍 k'am̐ ; II 藩 hp'am̐、難 nam̐、然 ram、干 kam̐、鞍 ngam̐

* 免 mam̐ は三等韻であるが -i- 介音の反映がない。

yam̐ : II 遣 k'yam̐、沿宴 yyam̐

wam̐ : II 管 kwam̐、満 mwam̐、叛 phwam̐

中古韻撰との対応は次の通りである。

am̐(am) : I グループは咸一開、II グループは山一開。但し軽唇音“藩”は三等合口、日母字“然”は三等開口である。

yam̐ : II グループのみ。山三四開であるが“沿”は三等(以母なので韻図上は四等)合口字。

wam̐ : II グループのみ。山一合。-w- は三例のうちの二字を占める唇音字においては音韻の意味を持たぬ修飾要素であるが、見母字“管”においては u 介音に相当する。

本資料において、中古音の咸撰は山撰に合流していると見るべきである。上記三形式の漢語音について、/an/ /ian/ /uan/ を仮定しておく。

② im 類。

im : I 親 c'im、印・im —— 臻三開 ; II 称 c'im、定 tim —— 曾三開及び梗四開

ここでは臻撰のほかに、現代北京で -ng 韻尾を保持している曾梗撰の字が混入している。この -n/-ng 不分の現象は、本資料において、陽声韻の内転系諸韻の表記を中心に、しばしば現れる。

③ um̐ 類。

母音符号 u、anusvāra、末子音 -m の三者の結合。西田(1972: 40)はこの結合について、「古い碑文中にもあらわれて来ないが、他の十八世紀の記録には認められる特殊な組み合わせ」であると言い、anusvāra と -m を重複表記と見なして単に um と転写して

いる。

uɰm : I 損 summ、良 kuɰm、温・uɰm ; II 隴 luɰm

yɰm : I 尊 syɰm、遵 cyɰm

中古韻撰との対応。I は臻撰一三等、II は通撰三等。“良”は開口字であり、母音表記が u である点が不規則である。誤写かもしれない。この“良”を除く全ては合口。

yum は s-, c- と結合している。本資料の s-, c- の後ろにおける -y- の有無は一般に不規則が多いため、この書写形式を持つ“尊遵”二字に i 介音を認めることは躊躇される。

深撰字の用例は見られない。

um, yum の両方に対して、形式 /uən/ を再構する。

4. 6. 5. -n 韻尾類

① an 類。

an/an/ : I 辦板 pan、盞 can、産 c'an、寒悍罕 han ; 安 ngan、… ; II 胆 tan、男南 nan、攬 lan、敢 kan

* “千” hc'an は四等字で i- 介音が予想されるが介子音 -y- を帯びていない点が不規則。

yan/iän/ : I 前錢全 c'yan、缺闕 k'yan、山 syan ; II 參 syan

* “缺闕”は入声山撰三四等合口、韻母の異常対音。別の字音との取り違えか。

* “參”は一等字で、-y- を帯びるのは不規則である。声母の対音にも不規則がある。

wan/uan/ : I 段 twan、乱 lwan、宣 swan、官冠館 kwan、万晩 wan、… ; II 犯 hp'wan

ywan/yän/ : I 遠 ywan

中古韻撰との対応。I は山撰、II は咸撰である。

an : I 山一二開、山四開 (“千”字) ; II 咸一開

yan : I 山三四開、山二開 (“山”字)、山三四合 (“全”字) ; II 咸一開 (“參”字)

wan : I 山一二合、山三合 (軽唇音を含む) ; II 咸三合 (“犯”字)

ywan : I 山三合 (“遠”字)

an 韻類においては、介子音 y, w, yw は、基本的に漢語音の i, u, y 介音と対応している。但し、c, c', s を基本子音とする場合は i 介音と y との対応が不規則になる。また、hp' (=f), m などの唇音を基本子音とする場合、介子音 w は音韻的な意味を持たない装飾的要素である。

“全”は三等合口で、撮口介音 y が期待されるが、緬甸文字表記は c'yan で、合口性が表現されていない。また“勸” hcwan と“宣” swan はいずれも三等合口で、やはり撮口介音 y が期待されるが、緬甸文字表記では細音性が表現されていない。c, c', s のもとでの介子音 y に関する不規則の現れである。なお“勸”は声母の面でも特殊で、

溪母字の通常の対音である k' ではなく歯音系の hc を取る（無気音表記である点も不規則）。見組細音字の口蓋化を反映するか。

② in 類。

in : I 民 min、隣 lin、珍真尽進 cin、人 rin、信 sin、…；II 審 hc'in、任 rin、金 kin、欽 k'in；III 誠城 c'in、明 min、皿 hmin、冷靈領 lin、頂 tin、…

* 非（微韻：止三合）hp'in は例外的。

yin : I 近 kyin、申身 syin、銀 yin；II 甚 c'yin、怎 cyin、陰飲 yyin；III 請 c'yin、井 cyin、静 hcyin

中古韻撰との対応。in, yin とも、対応に違いはなく、I は臻三開、II は深三開、III は梗三四開である。“冷” lin は梗撰二等韻で例外である。両方に /in/ を推定する。

舌歯音三等字“珍真臣誠城申身審甚人任”が含まれており、これらの韻母が現代北京語におけるが如き [ən] にはまだなっておらず、[in] と読まれていたことを示す。

“怎”は『広韻』や『集韻』にはないが、『中原音韻』侵尋韻上声 tsəm¹⁷、『翻譯老乞大』右側音 jem(低) など、-m 韻尾を示す。本資料では cyin と現れており、主母音がうまく合わない。

③ on 類。

用例は三つだけである。介子音のついた例はない。

on : 朕 con、寧 non、恩 ngon

音価として /ən/ を推定する。中古韻撰は深三開、梗四開、臻一開にわたる。“朕”“寧”は主母音として i が期待されるが o 表記である。

④ un 類。

un : I /un/、本 pun、門 mun、分 hp'un、寸 c'un、孫巡 sun、…——臻一合、臻三合（輕唇音“分”字）；II /uŋ/、東 tun、弄 lun、送 sun、総 cun、貢 kun、…——通一合

* “巡”は邪母三等合口で、期待される -y- がない。

wun : I /un/、文 wun、聞 wwun——臻三合（輕唇音）；II /uŋ/、捧 p'wun、重 cwun、功恭 kwun——臻一合、通一三合

yun : I /yn/ 順 hsyun、軍 kyun、雲運 yun——臻三合；II /yŋ/ 永 yun——梗三合

un と wun の中古韻撰の分布は同じで、同一の韻母に対する異なった表記法であると見られる。唇音字“分門”が -un 表記である点、/ən/ 韻母を取る現代北京語とは異なる。

yun は撮口呼の /yn/ /yŋ/ を表記したものと解釈するが、その /y/ の音声が前舌単母音 [y] であったか、二重母音的 [iu~yu] であったかは、この表記からは決め難い。本

¹⁷ 楊（1981）の再構音。

資料内に *ywin* 表記が見られないことは事実である。なお“永”字には、*yung* という表記も見られる。“順” *hsyun* の *y* は、*s* の後ろの *y* の出沒が不安定である本資料の性格に鑑みると、*i* ないし *y* 介音の存在を必ずしも意味しない。

4. 6. 6. -ñ 韻尾類

añ 類。*añ* は、雑字のビルマ語表記においては二様の音形式を表し、それらは西田 (1972: 72) によって、*/ee/*、*/en/* と再構されている。来文の *añ* は、ビルマ語の */ee/* を念頭に置いたと見られる転写（下で *añ* (一) としたのがそれ）が二例あるほかは全て */en/* を下敷きとした用法 (*añ* (二)) であり、鼻音韻尾字に対応する。大多数は介子音 *y* を伴い *yañ* の形をとる。

añ (一)：列 *hlañ* (入声山撰三等開口)、蛇 *rañ* (仮撰三等開口)

* 中古韻撰との対応関係から見て、これは *ac* 類と同じ韻母を表したものであり、漢語音としては、*/ie/* が再構できる。

añ (二)

añ：I 年 *ñañ*；II 占 *cañ*

yañ：I 辺編辨便辯 *pyañ*、面緬 *myañ*、天 *t'yañ*、先仙 *hsyañ*、間艱見件 *kyañ*、…；II 險限 *hyañ*、監 *kyañ*、点 *tyañ*

* 例外的対音：項 (江二開) *hyañ*

* 韻母形式 *yañ* には、音節綴りの右下方に一点がつけられていることがある。点が附される字は“辯面点件”の四字だが、うち“件辯”の二字は点がない用例もある。点の機能は不明で、西田 (1972) は無視している。本稿でも無視するが、*-añ* が */ee/*、*/en/* の二つの音価を持つことから、あるいは「鼻音を讀め」という意味でつけたものかもしれない。

wañ：I 線選 *swañ*；縁願員原元 *wañ*

* 例外的対音：緩完 *h-wañ*

中古韻撰との対応。I は山撰、II は咸撰である。

añ/iän/：I 山四開 (“年”字)；II 咸三開 (“占”字)

yañ/iän/：I 山二開 (牙喉音)；山三四開

wañ/yän/：I 山三合；山三開 (“線”字)

牙喉音声母下における『中原音韻』の寒山韻と先天韻、監咸韻と廉纖韻の区別に当たるものを認めることはできない。間艱 (二等山韻) と見 (四等霰韻) は同様に *kyañ* と記され、限 (二等産韻) と險 (三等琰韻) は同様に *hyañ* と記される。但し、一般に対音資料を扱う際、書き分けがなされていないからと言って音韻・音聲的区別が存在しないと断ずることはできないのであって、これをもって、来文が表記してい

る漢語音で寒山 / 先天及び監咸 / 廉纖の区別が消失していたと結論付けることはできない。

wañ は山撰三等合口字であるが、“線”は開口であり、例外的である。

また“緩完”は、一等韻である点が例外的である。

4. 6. 7. -ng 韻尾類

① ang 類。

ang : 邦 pang、蟒莽 mang、浪榔 lang、張長 cang、搶 hc'ang、…

* 例外的対音：半伴（山撰一等合口）p'ang

yang : 良両 lyang、将 cyang、常尚 c'yang、相鑲想象 syang、養仰様陽 yang…

* 例外的対音：擅（山撰三等開口）syang

wang : 方 hp'wang、傷賞霜 swang、広 kwang、獾 k'wang、王望 wang、…

中古韻撰との対応。

ang/aŋ/ : 江二開、宕一開、宕三開（舌齒音）

yang/iaŋ/ : 宕三開

wang/uaŋ/ : 宕一合、宕三合（軽唇音、正齒音及び云母“往王”字）、宕三開（“霜”字）、梗二合（“獾”字）

ang/aŋ/、yang/iaŋ/ については特に問題はないが、s, c, c' が基本子音の場合は、y の出没が不安定になる。例えば、同じく精組三等字であっても、“搶”では hc'ang と -y がなく、“将”では cyang と -y- がついている。

wang/uaŋ/ において、介子音 w は、軽唇音字“方” hp'wang では音韻的に意味を持たないのを除き、おおむね、漢語の u 介音に該当している。但し、正齒音開口の“傷賞霜” swang の -w- は、生母字であるために後から -u- 介音を持つに至った“霜”¹⁸を除き、-u- 介音と対応しない。

② aŋ 類。

aŋ/aŋ/ : 掌 câŋ、讓 râŋ —— 宕三開

yaŋ/iaŋ/ : 江 kyâŋ —— 江二開（牙音）

このグループによって表記されるのは上記三字のみで、中古音との対応は ang と同じである。雑字のビルマ語表記においても、江宕撰開口字は -ang、-aŋ の二つの韻類を音訳しておいる。“掌”と“江”は、雑字ではまさに câŋ、kyâŋ の音写に用いられ、“讓”についても、つくりと声韻を同じくする“穰”が râŋ の音訳に用いられている。来文においてこの三字が -ang ではなく -aŋ で音写されたのは、西田（1972:

¹⁸ 『洪武正韻訳訓』及び『四声通解』陽韻、“霜 śaŋ、俗音 soang”（検索には高田・越井・野飼・対音対訳資料研究会（1995）を用いた）や現代北京音 shuāngなどを参照。

199) が言うように、雑字におけるビルマ語と音訳漢字の対応関係から類推したものであり、ang とは異なる発音を音写する意図であったとは考えられない。

③ ing 類。

-ing という結合は、雑字のビルマ語表記には一例も見られない。従って、漢語音表記が強く意識された綴り字形式であると見なければならぬ。

ing: I 兵柄并並病 ping、令 ling、争正 cing、程情乘 c'ing 京敬 king、…——梗二開 (“争”字)、梗三四開、曾三開；

* 例外的対音：曾 c'ing (曾一開)

II 鎮 cing、斤 hking、貧瀨 phing、——臻三開；

III 今 king ——深三開

ying: I 盛 sying、硬 ying ——梗二開、梗三開；II 緊謹 kying、因 ying、引 yying ——臻三開

* 例外的対音：従 chying、享向 hying

I は梗曾撰、II は臻撰、III は深撰である。最も多いのは I である。ing と ying の違いは漢語の音韻の違いを反映しない。

④ ong 類。

ong: 蒙 hmong、等 tong、統 t'ong、能 nong、肯 kong、…——梗二開 (正歯音 “生” 字)、梗三開 (正歯音)、曾一開、通一合

yong: 另 hlyong、青 c'yong、聖 syong、景 kyong、応 yong、…梗三四開、曾三開

* 例外的対音：登 tyong (曾一開曾)

ong 韻類は基本的に漢語の開口韻に対応するので、その主母音として /ə/ を推定する。

ong/əŋ/, yong/iəŋ/

ong には、いずれも梗撰で、正歯音三等の “政” (章勁去三開) cong、“成” (禪清平三開) c'ong と正歯音二等の “生” (生庚平二開) song が含まれる。うち三等字については、同じ条件で ing, ying, yong など、口蓋化の要素を含んだ表記例も存在する。緬甸館来文の c, c', s の後ろの硬口蓋介子音 y の出没はもともと不安定であるが、口蓋性が全く表記されない cong や c'ong の表記は、これらの字の主母音が i ではなく ə のように響く場合もあったことを示すものかもしれない。但し、雑字に -ing が一例も見られないことから類推して、仮にビルマ語本来の単語に -ing が存在しないのだとすれば、ビルマ語本来の単語に存在する常識的綴り字の範囲内で表記を試みた結果であるにすぎない可能性もある。このように、本資料の緬甸文字表記に依拠して漢語音の音声の問題を論じることは、困難を伴う。一方、二等の “生” については、[səŋ]

あるいは [səŋ] のような音声形式を推定することも十分に許される。

“蒙” hmong と “統” t'ong は合口（通撰一等）で例外を成す。通撰一等字は ung 韻類で表記される例が多く、ung 韻類での表記がよりふさわしい。この二つの例外は、雑字の“霧”濛濛 hmong hmong (11)、及び“坐”痛 thong (284) などの対音関係¹⁹からの類推によって発生したものであるかもしれない。

yong と (y)ing は、同じく梗曾撰三等（及び梗撰四等）字を表記し、両様の書き分けが生じる条件を見出すことができない。前述したように、雑字には -(y)ing が現れない。一方、yong については、来文にもある kyong：“景”の対音例が「徳」景阻 kyong cuu (294) に見えている。西田 (1972: 111) は、この語のビルマ文語形を kyei2-juu としていて、雑字での綴り字形式がビルマ文語形と合っていないが、ともかくも、来文で漢語音のビルマ文字表記を行った人物は、おそらく雑字のこの対音例から類推して、梗曾撰三等及び梗撰四等字の一部に -yong を用いたのであろう。

⑤ ung 類。

ung も ing 同様、ビルマ語の表記には現れない韻形式である。

ung：I 孟 mung、通同 t'ung、中衆 cung、公 kung、洪紅 hung、… ——通一三合、曾一合（“弘”字）、梗二開（“孟”字）

wung：I 朋 mwung（並登平一開・曾）、II 准 cwung（章準上三合・臻）

* “朋”は声母の対応並平：m が異常。

yung：I 永 yung（云梗上三合・梗）、用 yung（以用去三合・通）

* “永”字には内藤本に yun の表記例も見える。

I は通曾梗撰合口字（唇音では開口字もあり）、II は臻撰合口字にそれぞれ対応する。

wung の -w- は、wu, wun の例におけると同様、音韻的意味を持たない。

yung の y は介子音ではなく子音字母で、三等合口の介音に対応している。

4. 6. 8. 閉鎖音韻尾類

『緬甸館訳語』雑字のビルマ語表記には、-k, -c, -t, -p の四つの子音文字が末子音として出現する。この四種の末子音の音価はどのようであったか。西田 (1972: 68-69) はこの問題を議論している。西田氏は、雑字において、末子音のない -V# 形式（例えば na, naa）と、閉鎖音の末子音をもつ -VC 形式（例えば nak, nat, nap）とが、漢語の同じ無韻尾字（例えば“那”）をもって音訳されていることに言及し、しかし現代ビルマ語諸方言では -V# が -VC から弁別されていることから、-VC に対しては、-V

¹⁹ 但し、284「坐」の用例の音訳漢字は、パリ・アジア協会本で“痛”となっているがベルリン本・Amiot 将来本・内藤本では“疼”となっている。一方、同じ語が現れている361「請坐」痛到木 t'ong tâ muu の項では、問題の音訳漢字は、パリ・アジア協会本も、他の三本も、全て“痛”に作っている。

ではなく声門閉鎖音を帯びた -Vʔ を設定した。その際「もし、これらの形式が -p -t -k であつたならば、その末尾音に対して、漢字一字が使われたであろうと推測できる」(西田 (1972: 69)) と述べ、-VC の末尾音 -p, -t, -k を一律に声門閉鎖音に設定することの根拠が音訳の手法(末尾音に対して漢字一字が使用されないこと)にあることを明かしている。西田氏は、乙種本『西番館訳語』の -b, -d, -g(但し、その更に後ろに -s が続かない場合)に対しても、『緬甸館』におけるとほとんど同じ思考の道筋によって、これらに声門閉鎖音を設定していた(西田 (1970: 64))。確かに、『西番館訳語』においては、「勅諭」龍-ト思革刺克思 lung-bsgrags(396)のように、末子音など母音が後ろに続かない子音一個に対して一つの漢字を当てている場合が多い。同じく乙種本の『回回館訳語』においては、基本的に全ての単子音(後ろに母音が続かない)が独立の音訳漢字によって表記されている。そのため、西番、緬甸の両訳語の音訳されない音節末子音について、口腔内調音のない [ʔ] を推定することは、理にかなっているようでもある。しかし、乙種本の音訳漢字全般を見ると、音節末の閉鎖子音が音訳されない場合はかなり多いのである。タイ系の百夷、八百、暹羅の各訳語の音訳漢字では、-p, -t, -k が独立の漢字一字をもって音訳した例が皆無であり、『高昌館訳語』においても表記されない場合が圧倒的に多い。丙種本の『安南館訳語』や『朝鮮館訳語』の音訳漢字においても事情は同様である。更科(2007)では、幾つかの言語の『華夷訳語』(乙種、丙種)における音節末閉鎖音の音訳様相を分析し、表記対象言語の音節末閉鎖音が内破音(持続部で音節が終わり、破裂をしない)で発音される場合は漢字音訳がなされにくいことを見出した上で、『西番館訳語』の -b, -d, -g は内破音であったために音訳されなかった可能性があり、西田(1970)のような声門閉鎖音をそこに推定する必要はないと主張した(更科(2007: 135))。『緬甸館訳語』の -p, -c, -t, -k についても同様に、声門閉鎖音に変化していたのではなく、その口腔内の閉鎖を、内破音という形でなお維持していた可能性がある。

① ak, at, ap。

/a/ : 紗沙 hrak (仮二開) ; 八捌 pat (入声山二開) ; 答 tat (入声咸一開)

/ia/ : 甲 kyap (入声咸二開)

/ua/ : 化 h-wak (仮二合)

末子音 -k, -t, -p は、中古音の韻尾 -k, -t, -p とは必ずしも対応していない。雑字には、次のような対音関係が見られる。

hrak : 沙 (269) ; pat : 八 (562, 563) ; tat : 打 (193, 231) ; kyap : 賈 (643, 654) ;
h-wak : 化 (615)

来文の漢語音表記は、これらの対音関係が利用されたものであろう。

② ac。

西田 (1972) による再構成音は /eʔ/ である。

ac : 者 cac、車 c'ac、謝 sac、百栢 pac、客 k'ac

yac : 墨 myac、節 cyac、写設 hsyac、也野 yac、業業 yyac…

wac : 惑獲 hwac、靴 hhwac、月日 wac

ywac : 説雪 sywac

再構形式、及び中古韻撰との対応

ac/e/ : 仮三開、入声梗二開

yac/ie/ : 仮三開、入声諸韻 (山三四開、咸三開)

* 不規則対音 : 活 hyac (入声山一合)、墨 myac (入声曾一開)

wac/ue/ : 果三合 “靴”、入声諸韻 (山三合、曾一合 “惑”、梗二合 “獲”)

ywac/ye/ : 入声山三合

この韻類においては、介子音 y, w, yw は一応漢語の /i, u, y/ と対応していると考えられる。但し個別の字には不規則がある：“謝” sac、“靴” hhwac、“月日” wac では期待される -y- がなく、一方“墨” myac では -y- が余分についている。

仮撰三等開口は e 類 (“這” ce、“舍” hre) とともに分布が重なっている。

③ âk。

âk /au/ : 帽 hmâk ; 陶 t'âk ; 璫 nâk ; 老 lâk ; 饒 râk —— 効一開、効三開 (日母 “饒” 字)

yâk /iau/ : 了料 lyâk —— 効四開

wâk /au/ : 少 hrwâk (効三開) ; 孝 hwâk (効二開)

âk 類は全て効撰字の表記に用いられているから、漢語音として /au//iau/ を推定する。なお効撰字は au, aw によっても表記されている。ただ au, aw は果撰字など /o/ 類の表記にも用いられるが、âk には /o/ 類を表記した例がない。

雑字には、次のような対音関係が見られる。

hmâk : 冒 (526) ; t'âk : 桃 (354) ; nâk : 腦 (276, 403) ; lâk : 老 (341) ; râk : 饒 (214) ;
lyâk : 了 (323) ; hrwâk : 少 (14)

“孝” を除く来文の漢語音表記は、これらの対音関係が利用されたものであろう。“孝” : hwâk は、-w- を説明することができない点において不規則である。

④ ik。

齋 (賈) cik (蟹四開)、始 sik (止三開)

/i/ を表記している。同じ韻母は i, ii によっても表記されている。雑字には -ik の結合が見られないため、この二字の表記は雑字における対音関係の応用ではない。

⑤ ip。

I 李 lip、宜·ip —— 止三開；II 辛新心 sip —— 臻三開 / 深三開

I は ik と同様、/i/ を表記している。II は異例で、鼻音韻尾 -n/-m が²⁰ -p で表記されている。lip：李の対音関係は『雑字』176, 567, 623に見え、·ip：宜の対音関係は『雑字』390に見える。そして、sip：辛の対音関係も『雑字』334に見える。この対音はおそらく『雑字』の音訳者の錯誤であると思われるが、『来文』の編者はこの誤った対音関係を踏襲し、“新心”の表音にまで応用してしまったのであろう。ここにおいて、深撰の“心”が、臻撰の“新辛”と同音の扱いを受けていることが注意される。即ち、-m 韻尾がすでに -n 韻尾に合流している。-ip の表記もまた、雑字における対音関係の流用を雄弁に物語るものである。

⑥ it。

茲（止三開）cit、織職即（曾三開）cit；赤（梗三開）c'it；襲（深三開）sit；的（梗四開）tit

c'it:赤と tit:的の対音関係は『雑字』に見える（以下、初見する項番号の表示を省略）が、他の例の対音関係は『雑字』に見られない。

⑦ ok。

白北 pok、珀 p'ok、勒 lok、則 cok、特得 tok、革 kok —— 梗二開、曾一開

*異常対音として持 tok がある（持は止撰、澄母之韻三等開口）。おそらく“特”と誤認して音写されたものであろう。なお“特” tok は現代語とは有気・無気が合わないが、中古音との対応上は、本資料のように無気音で現れる方が規則的である（“特”は全濁の定母字）。

ok は、入声の梗撰二等開口及び曾撰一等開口の韻母を表記するための結合として最も頻繁に選ばれ²⁰、かつ“持”を除きこれらの中古韻撰以外を表記した例がないから、漢語音表記として安定していると言える。また『雑字』において、-ok の用例は比較的少なく、白：pok と得：tok の対音関係（いずれも、『来文』にも認められる対音関係である）が認められるのみであるから、来文の編纂者は、『雑字』にはあまり現れない ok を、漢語のこの韻類の表記として最適だと感じて、積極的に用いたようである。

雑字のビルマ語母音字 o は単独では現れず、末子音との結合形式 ow, ok, oj として現れる。結合 ok の音価は、西田（1972: 77）によって /aʔ/ と再構されている。すでに述べたように、西田氏自身は、本資料の漢語音を、明の徐孝の『重訂司馬温公等韻図経』に対する陸志韋の再構音価を当てはめることによって理解しており、そこでは、

²⁰ ok 以外の表記例として、梗二開字には ac 表記の例が三つあり（百栢 pac；革 k'ac）、一方曾一開字には墨 myac、克 k'ra（非漢人系固有名詞の漢字表記に見える）、黒 htyii（綴り字全体が誤記）の例がある。

ok を音訳している“白”や“得”（『等韻図経』の拙撰開口篇に属する）の韻母として ε が再構されている。それにもかかわらず、ビルマ語の ok に対して、 ε をそのまま再構形とすることなく、 $/aʔ/$ という音価を与えたのは、西田氏が音訳漢字の示す音価よりもビルマ語としての体系性を優先した結果であり、逆にいま、来文の漢語音表記に現れる ok の漢語としての音価について、この $/aʔ/$ を出発点として考察しても、方法論上のトートロジーの過ちを犯すことにはならないだろう。西田氏は、『等韻図経』に立脚して、「明代漢語には「-ə#」はなかつた」と指摘している（西田（1972: 77））が、「なかつた」はずの $/ə\#/$ に極めて近い $ok/aʔ/$ が、陸志韋氏の再構音では ε を韻母として持つはずの入声梗二開及び入声曾一開字の表音に安定して用いられ、それに対し ε より近い $ac/eʔ/$ が用いられた例が“白革墨”など比較的少ないのは、本資料の漢語音と『等韻図経』の音系との間の不一致であると言える。より正確に言うなら、本資料には、入声梗二開及び入声曾一開字の主母音が $[a]$ である方言と、 $[\varepsilon]$ である方言とが混在していて、前者が主、後者が従である。

⑧ uk。

入声通撰三等の属 suk、浴 yuk の二用例がある。結合 uk は雑字のビルマ語表記には現れないから、この表音は雑字の対音関係からの類推ではなく、来文オリジナルということになる。音写者が、ビルマ語には存在しない結合 -uk をこの二字にわざわざ用いていることは、漢語音の側で、（西田氏が推定する）声門閉鎖音か、あるいは閉鎖子音 -k が実際に発せられていたことを示唆して重大である。明代官話に子音韻尾 -k があつたことは一般的にあまり考えられないし、『華夷訳語』の音訳漢字全般の趨勢から見てもありそうにない。しかし、部分的な南方方言の混入の可能性はある。一方、-k によって声門閉鎖音の表記が意図されていたと考えることは、明代官話としてはありうる。

⑨ up。

入声通撰一/三等合口の竹 cup、六麓陸 lup、及び遇撰一等の奴 nup の用例がある。cup：竹、六：lup、奴：nup の対音関係は雑字にも見えるもので、来文の音写者は雑字に見える対音関係をこれらの字の表音に応用したと考えられる。従って、-p は音韻的に無意味である。

⑩ ut。

出：c'ut（入声臻三合）、束 sut（入声通三合）、古 kut（遇一合）の用例がある。この三つの対音関係のうち“出：c'ut”と“古：kut”は雑字にも見出される。一方“束：sut”はこの対音関係が雑字の側に見出されないから、来文オリジナルの音写である。中古音から予想される韻尾は -k であるが、-t となっている。考えられる理由は複数

あるが、あるいは声門閉鎖を表す意図があったのかもしれない。

以上の閉鎖音韻尾類表記をまとめると、② ac、⑦ ok はそれぞれ /e/, /ə/ を表すための結合形式であると言え、-c や -k が当時の漢語の実際の閉鎖子音を表記したものであるとは考えられない。他のものの多くは、雑字におけるビルマ語表記と音訳漢字の対音関係を応用した結果閉鎖末子音がついたもので、現実の漢語音の反映ではないと考えられる。但し、来文オリジナルで、雑字の対音関係の流用とは考えられないものも見られるので、特にそれが入声字の場合は、漢語の声門閉鎖音を意図した表記である可能性も残っている。

6. おわりに

『緬甸館来文』に見られる漢語音の緬甸文字表記は、一見非常に不規則に見える。分析によって、その原因は、おおむね次の二つであることがわかった。

一、介子音 y, w, h の出現の複雑さ。この問題は、これら介子音と歯音系 c, c', s との共起において最も先鋭に現れる。漢語の二系列の歯擦音を緬甸文字で表そうとした努力の現れであったらう。

二、雑字における対音関係の応用。この手法はしばしば、漢語音にはない末子音などの余分な表記その他の不規則な綴り字の原因となる。

4.5.4節で考察した章莊組（摩擦音系）の表記は、来文の漢語音表記を施した人物が漢人であったならかくも多様にはならず、もっと一律な表記になったと思われる。従って、漢字音に緬甸文字表記を施したのは、ビルマ人である可能性が高い。このことは、本資料の性格を考える上で重要である。

本資料が描写している漢語音の性質については、入声梗曾撰一二等開口韻の主母音の音色の問題や、-n と -ng の混同の傾向など、論ずべきことがまだ多く残っているが、紙幅の関係上、詳述できなかったところが多い。今後の課題としなければならない。

参考文献

荻原 弘明（1965）「東洋文庫本華夷訳語・緬甸館雑字——附、訳史紀餘・緬甸国書——についての覚書（緬甸史雑考Ⅲ）」、『鹿大史学』13、1-28頁。

杏雨書屋（1985）『新修恭仁山莊善本書影』、財団法人武田科学振興財団発行、臨川書店制作。

杏雨書屋（2023）『第77回杏雨書屋特別展示会 「杏雨書屋の善本漢籍 一恭仁山莊本を中心に—』、公益財団法人武田科学振興財団。

更科 慎一（2007）『『華夷訳語』の漢字音訳法と東郷語の音韻変化に見られる平行性

- について」、福盛貴弘・遠藤光暁編『華夷訳語論文集』（大東文化大学語学教育研究所「語学教育フォーラム」第13号、2007年10月）、125-137頁。
- 更科 慎一（2022a）「『百夷館訳語』来文に見られる明代漢語の表音システムについて」、『東アジア文化の歴史と現在』、山口大学大学院東アジア研究科編著、白帝社、122-155頁。
- 更科 慎一（2022b）「『八百館来文』に見られる八百文字表記漢語について」、『山口大学文学会志』第72巻、2022年3月、75-112頁。
- 更科 慎一（2023）「『西番館来文』に見られるチベット文字表記漢語について」、『山口大学文学会志』、第73巻、39-78頁。
- 鍾 智翔（2010）『緬語語音の歴史語言学研究』、上海交通大学出版社。
- 高田 千尋・越井 直子・野飼 千津子 [資料作成]・対音対訳資料研究会富山支部 [編集発行]（1995）『漢語近世音朝鮮資料集覧』、1995年1月30日。
- 西田 龍雄（1970）『西番館訳語の研究』、松香堂。
- 西田 龍雄（1972）『緬甸館訳語の研究』、松香堂。
- 楊 耐思（1981）『中原音韻音系』、中国社会科学出版社。
- 李 思敬（1986）『漢語“児”[ㄝ]音史研究』、商務印書館。

【本研究は JSPS 科研費 JP20K00545 の助成を受けたものです。】